

# テオティワカンの土器についての一考察(2):トラミミロルパ期からメテペック期までの土器

Study of Teotihuacan Ceramics (2): from Tlamimilolpa Phase to Metepec Phase

佐藤悦夫  
SATO Etsuo

## 1 はじめに

標高約 2300m のメキシコ盆地の北東部に位置するテオティワカン遺跡は、前 1 世紀から後 7 世紀頃まで栄えたアメリカ大陸最大級の都市国家であった。紀元 1 年から 200 年にかけて都市が作られ、「死者の通り」を基本軸にして「月のピラミッド」、「太陽のピラミッド」、「羽毛の生えた蛇神殿(ケツァアルコアトル神殿)」等の巨大なモニュメントが建設された。この時期の土器の特徴に関しては前回まとめた(佐藤 2002)。

本稿では、都市が発展し多くの集合住宅が建設されるトラミミロルパ期~ショラルパン期、そして都市が崩壊に向かうメテペック期の土器を検討し、それぞれの時期に見られる土器の特徴、すなわち年代を決定する土器の属性を把握する。最後に土器の変化と社会の変化の関係を探ることが本稿の目的である。それぞれの時期の土器の特徴を把握するために、現在までに報告されているテオティワカンの土器に関する報告書(Bennyhoff and Millon 1967、Hopkins 1995、Muller 1978、Rattray 1971 1981 2001、Sejourne 1966、Smith 1987)を分析し、またアリゾナ州立大学テオティワカン研究所(メキシコ)にある土器のサンプルを実見し参考資料とした。

## 2 テオティワカン遺跡の土器の概略

テオティワカン遺跡の土器の分類では、土器の胎土や表面調整の属性に着目して同一の属性を持つものをひとつの Ware として分類する方法が一般的に使われており、テオティワカン産の土器では 10 の Ware<sup>1</sup>が定義されている(Rattray 1981: 107-129, 2001:113-121,295-297)。ラットレイによると同一の Ware は複数の時期に見られる。前回は、Coarse Matte Ware, Fine Matte Ware, Burnished Ware, Polished Ware, Painted Ware, Dense Ware, Granular グループ, Thin Orange グループとミカオトリ期までに出現する Ware について説明したので(佐藤 2002)、本稿ではトラミミロルパ以降に新たに出現する Ware について検討する。

Stuccoed and Painted Ware は、良質の胎土で素地の上に化粧漆喰が塗られ、文様が描かれる土器である。器種は、三脚付円筒鉢であり、蓋が付くこともある。この土器は、ショラルパン前期に出現し、メテペック期まで続く。

Copa Ware は、良質の胎土を持ち、表面に丁寧な研磨が施される。器種は、Vase(シリンダー状の鉢)とCopa(コップ)であり、典型的なCopa Wareはショラルパン前期に出現し、メテペック期まで続く<sup>2</sup>。特に、墓の副葬品として出土する。

San Martin Orange Ware は、やや粗い胎土を持ち、表面は、オレンジ色で研磨痕が見られる。代表的な器種は、Crater(高さ50cm程の大型の甕)とAmphoraであり、少数ながらJarも存在する。ショラルパン前期に出現し、メテペック期まで続く。

Teotihuacan Mold Impressed Ware は、Copa Ware と類似の胎土を有し、表面の色は淡褐色から黒色まで見られ、また表面調整もよく研磨され光沢のあるものから無光沢のものまでヴァリエーションがある。文様入りの型入れで作られ、この製作技法はメキシコ湾岸地域にも見られる。メテペック期の終末期に出現する。

### 3 トラミミロルバ期からメテペック期までの土器の特徴<sup>3</sup>

#### 3-1 トラミミロルバ期

ラットレイ (Rattray) によると、トラミミロルバ期 (前期: A. D. 200-250、後期: A. D. 250-350)<sup>4</sup> の土着の土器は Coarse Matte Ware、Fine Matte Ware、Burnished Ware、Polished Ware、Painted Ware、Resist Ware、Dense Ware にそれぞれ分類されている (Rattray 2001: 163-202)。

Coarse Matte Ware は、やや荒い胎土で表面もナデ調整が行われるだけである。器種は香炉で胴部が直立あるいは外傾し、底部は平底、口縁部は鐮状の口縁 (Flanged Rim) を持つ。また、この時期に新しい器形として Three-prong Burner が出現する。後期になると香炉の鐮が大きくなり、鐮の部分が胴部からより離れるようになる。Three-prong Burner は、前期とほとんど変化はない。後期になって新たに加わる器種は、カンデレロ (Candelerio) である。カンデレロは、携帯用の香炉あるいはランプと考えられている。大きさは、高さ約 5 cm、幅約 2 cm、長さ 5 ~ 6 cm であり、器形は炉の部分が 1 個のもの、2 個のものの 2 種類がある。表面は刺突文で装飾される。

Fine Matte Ware は、テンパーの無い良質の胎土で未焼成の黒色のバンドを持つ。前期には Cover Plate、Miniature の器種がある。Cover Plate は、香炉の蓋またはそれ自体香炉として使用された。器形は浅い皿を逆にした形で口唇部がしばしば装飾される。Miniature は、Plate、Bowl、Jar などの器種が見られる。後期になると Miniature には Amphora、Cover Plate、Three-prong Burner が器種として加わる。Cover Plate は、ほとんど変化が無い。また、Adorno と呼ばれる香炉を装飾するパーツが後期になって新たに出現する。

Burnished Ware では、Olla、Comal、Crater、Bowl が器種として存在する<sup>5</sup>。Olla では、前期に口縁部の内外面に赤いスリップが施された土器 (Slipped Red-orange Olla) が出現する。口縁部の形では、ミカオロリ期と類似の口縁部が肥厚する Wedge Rim が存在する他、新たに口縁部が水平まで外反する器形が見られる。後期になると、口縁部が水平になるまで外反する器形に赤いスリップが施される。また、ミカオトリ期までは無かった大型の鉢である Crater が前期に出現し、後期にも継続する。Bowl は、以前の時期と比べて器種の種類が減少し、前期では胴部が内湾する Simple Bowl が見られるのみである。後期になると Bowl は無くなる。また、後期には中空の三脚を持つ器高の低い Basin が再び出現する。この器種は、乾燥させた食糧を入れる容器とし機能していたと考えられている。胎土は、一般的に多くの細かい白色のテンパーを含むが、Olla では穴のあいている胎土が見られることから植物性のテンパーが使用されたことが窺われる。また、Olla の場合は、胎土の中央に焼成が不十分のため生じる黒色バンドが見られる。

Polished Ware は、文様の無い Monochrome グループと文様のある Incised グループに細分される。Monochrome グループは、表面の色により褐色系と黒色系に分類される。器種としては、Bowl (Simple、Outcurving、Flare)、Vase、Jar、Florero などが一般的な器種で、Plate や Tlaloc Jar は少数である。トラミミロルバ期の胎土は、硬くて前の時期に比べてテンパーは少ない。灰褐色の胎土に細い黒色バンドが見られる。Outcurving Bowl は水平まで外反する口縁部を持ちやや大型の Nubbin Support (円錐形三脚) が付く。後期になると口唇部は前期より丸くなり、また口縁部は薄くなり、Nubbin Support も小さくなる。胎土も前期ほど良好ではない。Vase も大きく外反する口縁部や直立する口縁部を持つ。小型の Vase には Nubbin Support が付くようになり、また新しい三脚として中空の四角の三脚が出現する。Incision の装飾は、中型の円錐形三脚の付く Bowl の底部に主に見られ、その他 Vase や Jar にも施される。Incision による装飾としては、ミカオトリ期から継続する研磨された部分と研磨されない部分を Incision によって区別する装飾や様々な幾何学文様が描かれる。また、Incision の施文の技法としては、焼成前に施文しその文様の上からさらに表面を磨く場合と、焼成後に先の細い施文道具を使って施文する場合の 2 通りの方法がある。後期には、Vase に Plano-relief が施される。この技法は、Incision と削り取りにより土器に浮き彫りの文様を施す技法であり次のショラルパン期に発展する。

Painted Ware は、赤色が土器の全面に施された Monochrome Red グループと Bichrome グループ (Red on Natural, Red on Natural Incised, White on Red) に細分される。前期の Painted Ware に使用される赤色顔料には、赤鉄鉱を使用した Specular Red が出現し、この特徴は時期を定める指標として重要である。器種としては、両グループとも Bowl (Outcurving, Simple), Vase, Miniature がある。胎土は良質で、灰褐色の胎土に黒色のバンドが見られる。後期になると器種は、Jar や Dish、そして口縁部が赤くペイントされた Crater (Red Crater) が前期の器種に加わる。特に Red Crater は後期にはじめて出現するタイプである。胎土は、良質で硬いが黒色バンドを持つタイプと、やや粗いが良く焼かれ黒色バンドの無いタイプの2種類がある。後期になると、赤のペイントは前期に比べて厚く塗られ、また Specular Red が一般的になる。また、Red on Natural Incised の土器では、Incision によって縁取りされた中にペイントを施す技法が見られる。

Resist Ware は、少数ながら存在する。器種は、Outcurving Bowl と Vase の2種類である。パトラチケ期から続いていたネガティブ文様の伝統は、トラミミロルバ前期でテオティワカンでは無くなる。

Dense Ware は、サクワリ期に出現しトラミミロルバ前期にかけて増加しその後徐々に減少してゆくグループである。器種は、ほとんどが小型で器高の低い Simple Bowl であるが、わずかながら Jar や Shouldered Bowl が存在する。胎土は、硬くテンパーの無い良質なもので、黒色バンドがしばしば見られる。後期になると Dense Ware の Bowl の特徴は徐々に薄れ Polished Ware の Bowl と同じようになる。器種としては、Jar, Bowl (Simple, Incurved) がある。

トラミミロルバ期は、テオティワカンの土器製作において新しい器種や装飾技法が出現するなど大きく変化する時期である。Three-prong Burner、組み合わせ式の香炉 (Composite Censer) やカンデレロ (Candelero) などの香炉において新器種が見られる。また、装飾技法では前時代の Cross-hatch Incising や Fluting の技法が無くなり、Groove Incising、Plano-relief や赤鉄鉱を使用した Specular Red のペイント等がこの時期に出現する。また、Burnished Ware の Olla は、口縁部が水平まで外反するようになり、後期になるとそれに赤いペイントが施されるようになる。また、Polished Ware では、黒色バンドを持つ硬い胎土がこの時期の特徴である。

### 3-2 ショラルバン期

ショラルバン期 (前期: A.D. 250-350、後期: A.D. 350-450) の土着の土器は、Coarse Matte Ware、Fine Matte Ware、Burnished Ware、Polished Ware、Painted Ware の他に、この時期に新たに Copa Ware、Stucco Painted Ware、San Martin Orange Ware が加わる。また、トラミミロルバ期にあった Resist Ware、Dense Ware は無くなる (Rattray 2001: 203-268)。

Coarse Matte Ware は、器種として Incensario、Three-prong Burner、Candelero がトラミミロルバ期から継続する。Incensario は、胎土や表面調整にはあまり変化がないが、Flange の形は時期ごとに大きく変化する。ショラルバン前期の Flange は、大きく外反し Flange の口唇部は丸または斜めに切られる。後期になると Flange の部分は大きく外反せず胴部あまりから離れなくなる。Three-prong Burner は、前期後期通して大きな変化は無い。Candelero は、炉が2つになる Double-chambered が一般的な形となる。

Fine Matte Ware は、Miniature、Cover plate、Adorno の器種があり、前期、後期を通してあまり変化は無い。Miniature は、直径 10cm 以下の小型の Bowl、Plate、Olla、Florero などの器種があり、墓の副葬品として主に使用された。前期の Cover plate は、紐状の取手の無い器形であるが、後期になると取手が付けられる。Adorno は、ショラルバン期になって一般的になる。型入れで作られるこれらの香炉を装飾するパーツの種類は多く、動物、植物、蝶、貝、鳥の羽等が見られる。

Burnished Ware は、Olla、Comal の2種類の器種があり、前期の Olla は、器厚が厚く、短い頸部、口縁部が水平まで外反する特徴を持つ。口縁部には、Specular Red のペイントが一般的に施される。後期になると、頸部はより短くなり、口縁部は丸くなる。口縁部には Non-specular Red のペイントが施される。Comal は、前期、後期を通してあまり大きな変化はなく、トラミミロルバ期と比較して器厚が薄くなり、より浅い皿になる。ラットレイによると前期では直径 18cm ~ 22cm、器厚 0.5cm ~ 0.6cm であり、後期では直径 20cm ~ 28cm、器厚 0.4cm ~ 0.5cm である (Rattray 2001: 215、247)。

Polished Ware には、Bowl (Outcurving, Simple, Upright)、Vase、Jar、Florero、Tlaloc の器種が見られる。出土量は、トラ

ミミロルバ後期では約 50%であったがシヨラルパン前期では 34%と減少の傾向にある (Rattray 2001:215)。最も一般的な器形である Outcurving Bowl の特徴には、トラミミロルバ期に良く見られた Nubbin Support がほとんど付けられなくなる。後期になると表面調整に Pattern Polish 技法が出現する。これは、表面の一部だけを強く研磨し、他の部分との研磨の違いにより文様を描く技法である。Vase は、トラミミロルバ期に出現した三脚付円筒形鉢 (Cylindrical Tripod Vase) がシヨラルパン前期にも引き続き見られ、三脚は中空の丸い形 (Hollow Round Support) や中空の四角い形 (Hollow Rectangular Support) であり、Vase の下部に罎 (Flange) が付けられるのがこの時期の特徴である。装飾のあるタイプは、アップリケや Incision により文様が描かれる。また、この時期に一般的な装飾技法となる Plano-relief 技法は、削り取りにより人物などのモチーフを浮き上がらせる技法であり、三脚付円筒形鉢に施される。後期になるとモチーフが人物像等の具象的なものから幾何学文様等の抽象的なモチーフへと変化し、質も落ちる。

Painted Ware は、赤色が土器の全面に施された Red グループと赤の顔料で文様を描いた Red on Natural グループに分けられる。Red グループの器種は Bowl、Jar、Crater であり、特に Red Bowl がこの時期にピークを迎える (Rattray 2001:227)。赤の顔料は Specular Red が使われ、表面は良く研磨され光沢がある。器形は、胴部が内湾し口縁部が外反する。Red Crater も全面に Specular Red が塗られ口縁部が外反し、器厚も厚くなる。この口縁部が外反する器形は、シヨラルパン前期に出現する器形である。Red on Natural グループには、Basin、Dish、Vase の器種が見られる。赤の顔料で文様の描かれた Basin は、この時期に最初に出現し、器厚の厚い浅い鉢型で低部には大型の丸い、中空の三脚が付く。文様は、平行線、円、渦巻きなどの幾何学文様が描かれる。Vase は器厚の薄く直立または外傾する胴部を有し、Specular Red で文様が描かれる。後期になると Red グループでは、Crater、Jar の器種があり、Red on Natural グループでは Crater、Dish、Jar、Basin、Vase がある。文様は円や平行線等の幾何学文様が描かれるが、前期のように厚いペイントは施されなくなる。Vase には中空の丸または円筒形の三脚が付き胴部の裾の部分には Flange が付き装飾される。

Copa Ware は、良質の胎土や表面調整および規格化された器形によってテオティワカンの他の土器とは区別される。胎土には、テンパーは入れられず粘質で未焼成の黒色バンドを有する。表面は良く研磨され、Incision や Plano-relief の装飾が施される。器種は高台付コップや口縁部が直立する三脚付円筒土器で、三脚はしばしば型入れで作られる。後期になると Incision や Plano-relief の彫りが深くなり、デザインも豊富になる。最も一般的な器種は、直立する胴部をもつ円筒形の土器で底部には中空の四角または丸い三脚が付く、Flange は無くなる。

Stucco Painted Ware は、シヨラルパン前期にタイプとして確立する土器である。胎土は基本的に Polished Ware の Vase の胎土と同じく良質で、表面調整は研磨された表面に漆喰が施される。文様は、黒でモチーフのアウトラインが描かれその中に赤、黄色、白、緑等の顔料が塗られる。器種は Bowl、Jar、Vase があり、Vase は中空の四角い三脚が付く。後期になると、アウトラインが描かれること無く直接顔料を使って文様が描かれる。器種は胴部がやや外傾する三脚付円筒鉢のみで Jar や Bowl は無くなる。

San Martin Orange Ware もこの時期に出現する土器であり、トラミミロルバ後期の Crater や Jar から発展したものである。胎土は、やや粗雑であるがオレンジ色 (5YR 6/6, 5YR 6/8) で硬く、表面は研磨され色はほぼ胎土と同様である。器種は、Crater、Jar がある。後期になると胎土の色は赤みが強くなり、また硬く焼成時のむらが無いことからかなり高温で焼かれたものと考えられている。表面の色もオレンジ (2.5YR 6/6, 5/4) が一般的であり、まれに赤褐色 (2.5YR 4/4, 4/6) も見られる。器種は、Amphora が新しい器種として加わり、Crater は口縁部が外反するようになる。Crater の大きさは、口径が 50cm ~ 60cm の大型のものと、30cm ~ 40cm の小型のものがあり、高さは平均で 35cm ~ 40cm である (Rattray 2001:265)

シヨラルパン期の土器の特徴は、新しい Ware として前期に Copa Ware と San Martin Orange Ware が出現することである。また、Adorno で飾られた香炉も出現する。一般的にシヨラルパン前期はトラミミロルバ期に確立された新しい技法や器種がより洗練される時期である。後期になると大量生産が可能な土器の標準化や技術の改良が行われた。特に、San Martin Orange Ware はこの時期にピークを迎え、その生産遺跡と考えられている Trajinga では大規模な土器の生産が行われていた。また、Teopanxaco では Polished Ware や Copa Ware が生産されたと考えられている。

## 3-3 メテベック期

メテベック期 (A.D.550-650) の土着の土器は、Coarse Matte Ware(Matte Ware を含む)、Fine Matte Ware, Burnished Ware, Polished Ware, Copa Ware, Painted Ware, Stucco Painted Ware, San Martin Orange Ware がある。Teotihuacan Mold Impressed Ware はメテベック期の終末期からコヨトラテルコ(Coyotlatelco)期の初期に位置付けられる土器グループである。

Coarse Matte Ware では器種として Incensario, Three-prong Burner, Candelero がシヨラルパン期から継続する。Incensario では口縁部の Flange は折り返し (Over-hang) が無くなる。Three-prong Burner は Bruner の部分に様々な装飾が施される。特に、テオティワカンの神々が型入れ技法によって表現されるのが特徴である。Candelero は表面調整や "Thumbing" 技法による装飾が雑になる。

Fine Matte Ware には、Cover Plate, Medium-size Jar, Miniature の器種がある。この時期の Cover Plate は、以前の時期と比べて丸みが無くなり、胴部は外傾するようになる。中央部は平らになり、胴部にはしばしば紐状の取手が付けられる。Miniature では、Dish, Jar, Bowl の器種が見られる。

Burnished Ware には、Olla, Cantaro の 2 器種がある。この時期の Olla は、口縁部が肥厚した大きく外反する (Roll rim)、頸部は短く表面は調整されている。Cantaro は、厚い器厚(1.2cm~1.4cm)をもつ大型の壺で 2 から 3 個の取手を胴部に持つ。

Polished Ware には、Bowl(Outcurving, Upright, flaring, Ring Base), Jar, Vase, Florero, Tlaloc, Plano-relief Vase の器種が見られる。Outcurving Bowl は、内面のみが研磨され外面は研磨されない。また Pattern Polish の装飾が内外面に見られる。Upright Bowl や Flaring Bowl では表面の一部分だけが研磨される "Zone Polish" があり、研磨されていない部分とコントラストを示す。また、Incision の装飾も見られる。メテベック期の Incision の技法は深い V 字の形で他の時期の技法と異なる。口径が 16cm から 20cm、高さ 8cm から 12cm の大型で三脚の付かない Flaring Bowl はこの時期の典型的な Bowl である。Vase でも Bowl と同様に Zone Polish の技法が見られ、研磨されていない部分にはしばしば平行線や円などの幾何学文様が Polishing line で描かれる。Florero, Tlaloc, Plano-relief Vase は出土数が少ない土器であり、Plano-relief Vase では、Plano-relief の装飾技法も雑になる。

Painted Ware には、単色の Monochrome グループ (Painted Red) と Red on Natural グループがある。Painted Red グループでは Bowl, Jar の器種があり、また Red on Natural グループでは Bowl(Upright)、Basin, Crater, Jar, Dish, Vase の器種が見られる。Painted Red グループの Bowl は Specular Red の顔料が使用されるが、Red on Natural の Bowl では研磨も粗雑で Non-specular Red の顔料で文様が描かれるものもある。Jar は、頸部に鰐(Flange)が付けられるのがこの時期の特徴であり、顔料は Specular Red あるいは Non-specular Red が使用される。Red on Natural の Jar の文様は、胴部の上部に施文され、モチーフは幾何学文様が主である。Basin は、外傾または直立する胴部を有し平底の底部に円柱形の三脚が付く。口縁部にしばしば動物を形どった装飾(Effigy Prongs)が付けられる。赤の顔料で幾何学文様が描かれ、文様部分は Incision で縁取りされる。Crater は大型の鉢で口縁部は外反する器形を有する。文様は Non-specular Red を使った幾何学文様や花弁などの具象的な文様がオレンジ色の表面色の上に描かれる。Dish は、胴部が外傾し平底の器形で Specular Red あるいは Non-specular Red で幾何学文様が描かれる。Vase はシヨラルパン期では Specular Red を用いて文様が描かれていたが、メテベック期では薄い Non-specular Red で幾何学文様が描かれる。

Copa Ware では器種としてはコップ (Copa) と Vase の 2 種類がある。前期と比較して Specular Red の顔料を使用した文様や Incision の技法を使った幾何学文様が描かれるケースが多くなる。コップの口径は 9~10cm でしばしば底部に高台が付く。Vase は 9~12cm の口径を有し、型入れで作られた板状の三脚(Mold Solid Slab Support)はなくなり中空の円柱形の三脚(Hollow Round-based Support)付けられる。

Stucco Painted Ware では、Vase と Bowl の器種がある。シヨラルパン期と比較して大きな変化は無い。文様は人間、動物、植物等の具象的なモチーフが描かれる。Vase は口径が 14~18cm で、底部には中空の四角の三脚やタルー・タブレロ型の三脚が付く。

San Martin Orange Ware では、Amphora, Crater, Basin の 3 器種がある。器高が 50~60cm の長頸壺である Amphora はこの時期に一般的となる。頸部は内傾し、口縁部が強く外反 (Roll Rim) する器形がこの時期の特徴である。大型の深鉢である Crater は、シヨラルパン期と比べて作りが雑になり、表面の色もオレンジではなく灰褐色 (5YR 4/2) や淡褐色 (7.5YR 6/4) となる。口縁部

は外反したり、口縁部外側が斜めに切られるものなどが見られる。Basinには、Specular RedやNon-specular Redを使った文様が描かれるのがこの時期の特徴である。器形は器高が低く(9~12cm)、外傾斜する胴部を持ち、口径は20~30cmである。

Teotihuacan Mold Impressed Wareは、出土数の少ない土器グループで器種としてはBowl(Simple, Flaring)がある。この土器グループの特徴は、文様入りの型入れで作られたレリーフ状の装飾を有するである(Mold-made Relief Decoration)。表面の色は、淡褐色から黒色まで見られ、また表面調整もよく研磨され光沢のあるものから無光沢のものまでヴァリエーションがある。

メテペック期の土器の特徴としては、ショラルパン期と比較して表面調整が粗雑で、焼成温度の低下等土器製作が全体的に雑になることが挙げられる。また、器種ではCoarse Matte Wareの香炉やThree Prong Burner、Fine Matte WareのCover Plate等の出土数が多く、San Martin Orange Wareでは、Amphoraが一般的な器種となる。装飾技法では、Zone-polishやPattern-polish技法、あるいは型入れ技法による装飾が多用される。Teotihuacan Mold Impressed Wareは、メテペック期に始めて出現する土器グループでメキシコ湾岸地域との関係が示唆されている。

#### 4 年代を決める属性

##### 4-1 Ware, Form レヴェル

テオティワカンの土器は、Ware レヴェルで捉えるとパトラチケ期からメテペック期まで継続する土器のWareと途中から出現する(あるいは途中で消滅する)Wareに分けられる(表2)。前者に相当するWareは、Coarse Matte Ware、Fine Matte Ware、Burnished Ware、Polished Ware、Painted Wareであり、後者はトラミミロルバ後期で消滅するDense Ware、ショラルパン前期から出現するCopa Ware、Stucco Painted Ware、San Martin Orange Wareやメテペック期に出現するTeotihuacan Mold Impressed Wareがある。従ってある遺構の年代を決定する場合も、どのWareに属する土器が出土しているかで大まかな年代が決められる。

また器種や器形レヴェルでもそれぞれの時期に特徴的なものが見られる。Tecomateはパトラチケ期で消滅する器種でそれ以降の時期では出現しない(表1、佐藤 2002 表3)。また、Shouldered Bowlはトラミミロルバ後期以降、Angled BowlやCorrugated Bowlはサクワリ後期以降、Pinched Bowlはミカオトリ期以降それぞれ出土していない。逆に、Outcurving Bowlはミカオトリ期以降、Craterはトラミミロルバ前期以降、Copaはショラルパン以降、Cantaroはメテペック期にそれぞれ出土する土器である(表1、佐藤 2002 表3)。香炉ではトラミミロルバ前期にThree-prong Burnerが新しい器形として出現し、後期には携帯用の香炉と考えられているCandeleroが出現する。このように器種や器形レヴェルの特徴でも大まかな年代決定は可能である。

##### 4-2 Burnished Ware のOllaにおける年代を決める属性およびその組み合わせ

大まかな土器の年代は、上述したようにWare レヴェルや器種や器形レヴェルで同定可能であるが、実際には更に細かい年代決定が要求される。そのためにはある時期のみに存在する属性やいくつかの属性を組み合わせその時期固有の属性を探し出す必要がある。本稿では、出土数も多くかつパトラチケ期からメテペック期まで出土するBurnished WareのOllaを一つのケース・スタディとして検討する。発掘によって出土する土器はほとんどが土器片であるので情報量の多い口縁部の土器片で確認できる胎土、表面調整、口縁部、口唇部、装飾に関する属性を抽出し(表3)それぞれの時期の特徴を検討した。

パトラチケ期固有の特徴は、他の時期と比較してテンパーの少ない粘質の胎土を有し、口縁部が肥厚し丸くなるRound Wedge Rimを有することである。また口縁部が肥厚するWedge Rimのヴァリエーションとして口唇部が斜めにきられるもの(Beveled-out Wedge Rim)、水平になるもの(Plain Wedge Rim)があるが、これらはサクワリ期にも出現する属性である。口唇部には押圧によって施文されたThumbing Lip(口唇部が連続的な波型になる)やNotching Lip(間隔をあけて押圧された文様を持ち、連続的な波型にはならない)があるが、これもサクワリ期に一般的になる特徴である。

サクワリ期固有の特徴は、白色のテンパーが入れられた赤褐色の胎土あるいはテンパーを多く含んだ粗雑な胎土を有することである。口唇部の装飾において口唇部の中央部に浅い溝をつけたり口縁部内側が削り取る技法(Gouging Lip)がこの時期に出現する。Plain Wedge RimやBeveled-out Wedge RimまたThumbing Lip、Notching Lipはパトラチケ同様に見られる。

ミカオトリ期のOllaは、細かい白いテンパーを含む良質の胎土を有し、サクワリ期から継続する特徴としてGouging LipやPlain Wedge Rimがある。またトラミミロルバ期に一般的になる外反する口縁部はこの時期に出現する。パトラチケ期やサクワリ期で見られたThumbing Lip, Notching Lipは無くなる。ミカオトリ期は古い伝統が終わり新しい伝統が生まれる移行期と考えられる。

トラミミロルバ期の特徴は、前期と後期では異なる。前期では、口縁部の内外面に赤のスリップが施され、口縁部は水平まで外反するようになることである。胎土はミカオトリ期から継続する白いテンパーを含む良質の胎土を有する。後期になると口縁部の外反は前期よりも強くなり、口唇部にのみ赤のスリップが施される。胎土も前期よりは荒い胎土で柔らかい。

ショラルパン期の特徴は、口縁部が大きく外反し全体が丸くなる(Roll Rim)口縁部を有することである。頸部はほとんど無くなり無頸壺に近くなる。前期では口縁部にSpecular Redのペイントが施されるが、後期にはNon-specular Redのペイントとなる。胎土では、トラミミロルバ後期から継続するやや粗雑な褐色の胎土である。

メテベック期では、口縁部が肥厚するRoll Rimを有する。頸部はショラルパン期と同様にほとんど無くなり無頸壺となる。胎土はやや粗雑な褐色の胎土である。

## 5 まとめ

テオティワカンの土器は、パトラチケ期、サクワリ期、ミカオトリ期、トラミミロルバ期、ショラルパン期、メテベック期と大きく6つの時期に分けられているが、建築活動や居住地域の変化、他地域との交流などの社会的変化と関連付けてそれぞれの時期の土器の特徴をまとめる。

パトラチケ期は、テオティワカンが都市として発展する最初の時期である。都市の北側(通称、Old Cityと呼ばれる地域)で主に居住の痕跡が見られる(Cowgill 1974: 381-384, Millon 1973)。この時期の土器は、メキシコ盆地の南側にあるクイクイルコ(Cuicuilco)の土器に類似していると言われている(Muller 1990)。パトラチケの土器については、ブラッチャーのトラチノルパン遺跡の報告(Blucher 1971)を中心に前回報告したが、その特徴はBurnished Wareが多くPolished WareやCoarse Matte Wareなどが少なかった点にあった(佐藤 2002)。

サクワリ期は、テオティワカンが大きく拡大し、居住地域は北部を中心に20平方キロメートルの広さになる(Millon 1973)。この時期に都市建築が開始し、「月のピラミッド」や「太陽のピラミッド」が建設された。土器ではパトラチケの伝統を引き継ぎ、Burnished WareのOllaでは口縁部や口唇部で類似の要素も多い。またResistグループはこの時期様々な装飾パターンが出現するなど大きく発展する。また他地域からもたらされた土器と考えられるGranularグループやThin Orangeグループなども加わり都市の発展とともに交流地域が増えたことが窺える。

ミカオトリ期の都市の広さは、約20平方キロメートルとサクワリ期とほぼ同じであるが、サクワリ期の居住があった北西部では人が住まなくなり、ミカオトリ期では南側や東側に居住地域が広がる(Millon 1973)。この時期に「死者の通り」の南側に「シウダデラ」や「羽毛の生えた蛇神殿(ケツァアルコアトル神殿)」が作られ、また「月のピラミッド」や「太陽のピラミッド」の増改築が行われテオティワカンにおける3つのモニュメントの基本的な建築は完成する。土器ではPolished Wareが質的にも量的にも豊富になり、Outcurving Bowlが代表的な器形となる。Burnished WareのOllaでは次のトラミミロルバ以降に発展する外反する口縁部が出現する。この時期は、パトラチケ期からサクワリ期まで続く伝統とトラミミロルバ以降発展する伝統が混在する時期である。

トラミミロルバ期は、建築活動が盛んになり、新しい建築技術も生まれ、一般の居住地では集合住宅が出現する。これらの石を使用した建造物は、以前の建造物の上に作られた。このようにして都市全体がリニューアルされた。また、ケツァアルコアトルの神殿では、正面にアドサダと呼ばれる付属の建造物が作られ神殿の正面が覆われた。また、トラミミロルバ後期にはグアテマラのカミナルフュー遺跡やオアハカ地域、メキシコ湾岸のヴェラクルス等に影響を及ぼした。また、イダルゴ州のパチューカからもたらされた緑色の黒曜石は、この時期に増加する。テオティワカンで製品化されたと考えられる緑色の黒曜石のナイフ等は、メソアメリカ各地で発見されている。(Millon 1973)。土器では、香炉や三脚付円筒鉢などメテベック期まで続く新しい器種が出現し、Burnished WareのOllaでもショラルパン期で発展する要素の先駆的なものが見られる。

ショラルパン期はメソアメリカの各地で、テオティワカンの影響が見られる時期である。当初、宗教や商業のセンターであったテオティワカンは、メソアメリカ最大の都市へと成長し、各地の商人等も住んでいたと考えられている(Millon 1973)。土器では、Copa Ware、Stucco Painted Ware、San Martin Orange Wareなどの新しいグループが出現し、トラミミロルバ期から継続するBurnished Wareなどのグループでも前の時期の要素を発展させた新しい特徴が見られる。

メテベック期は、テオティワカンが崩壊する時期であり、土器製作でも全体的に製作技法が雑になる。

今後の課題として、それぞれの時期の絶対年代の問題が挙げられる。ラットレイは、2001年の土器の報告書では、トラミミロルバ期を従来のA.D.200-450年からA.D.200-350年に、ショラルパン期を450-650から350-550に、メテベック期を650-750から550-650にそれぞれ100年早めた(Ratray 2001)。トラミミロルバ期以降、テオティワカンの影響はメソアメリカ各地に及んでいるので他地域の編年との整合性を考える必要がある。最終的には、テオティワカンの時期区分の絶対年代を古い時期から新しい時期まで層位的に重なり合った遺構およびそれぞれの遺構から出土するC14の年代データを使用しながら再考する必要があると考えられる。

---

註

1 : テオティワカン産の土器のWare(Ratray 1981: 107-129, 2001:113-121 295-297)

- Coarse Matte Ware
- Fine Matte Ware
- Burnished Ware
- Polished Ware
- Painted Ware
- Stucco and Painted Ware
- Coapa Ware
- Dense Ware
- San Martin Orange Ware
- Teotihuacan Mold Impressed Ware
- 他地域から交易品としてもたらされた土器
- Granular グループ
- Thin Orange グループ

2 : トラミミロルバ後期に粗い胎土を持つ類似の器種が出現するが、これらはCopoidと呼ばれている (Ratray 2001: 119)

3 : トラミミロルバ期、ショラルパン期、メテベック期の土器の特徴に関しては、ミュラー(Muller 1968)、スミス(Smith 1987)、ベニホフやミリオン (Bennyhoff and Millon 1967)等の研究があるが、現在はラットレイの報告書 (Ratray 1974, 1981, 2001) が土器研究の基本書となっているので、本稿ではラットレイの報告書を中心にまとめた。これらの土器に関しては、アリゾナ州立大学のテオティワカン研究所(メキシコ)にあるラットレイ・コレクションを実見し、本稿の記述の参考にした。

4 : ラットレイは2001年の報告書では各時期の絶対年代を次のように修正した(Ratray 2001:435)。括弧内は従来の絶対年代

パトラチケ期:	B.C.150-B.C.1	(B.C.150-B.C.1)
サクワリ期:	A.D.1-150	(A.D.1-150)
ミカオトリ期:	150-200	(150-200)
トラミミロルバ前期:	200-250	(200-350)
トラミミロルバ後期:	250-350	(350-450)
ショラルパン前期:	350-450	(450-550)
ショラルパン後期:	450-550	(550-650)
メテベック期:	550-650	(650-750)

5 : 器種、器形に関しては前回の論文(佐藤 2002)参照。



## 参考文献

- Bennyhoff, James A. and Rene Millon  
1967 "Draft of Teotihuacan Ceramic Monograph"  
Unpublished Manuscript
- Blucher, Stephen F.  
1971 "Late Preclassic Culture in the Valley of Mexico: Pre-Urban Teotihuacan"  
Ph.D. dissertation, Brandies University, Waltham, Mass
- Cowgill, George L.  
1974 "Quantitative Studies of Urbanization at Teotihuacan"  
*Mesoamerican Archaeology: New Approaches*, Norman Hammondo (ed.), University of Texas Press, pp.363-396
- Hopkins, Mary Randolph  
1995 "Teotihuacan Cooking Pots: Scale of Production and Product Variability"  
Ph.D. dissertation, Brandies University, Waltham, Mass.
- Millon, Rene  
1973 *Urbanization at Teotihuacan, Mexico Vol. 1*  
University of Texas Press
- Muller, Florencia  
1978 *La Cerámica del Centro Ceremonial de Teotihuacán*  
Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico  
1990 *La Cerámica de Cuicuilco B*  
Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico(INAH)
- Rattray, Evelyn  
1972 "The Teotihuacan Ceramic Chronology: early Tzacualli to early Tlamimilolpa phase"  
Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Missouri, Columbia  
1981 "Ceramic Chronology: Early Tzacualli to Metepec phase"  
Unpublished Manuscript  
2001 *Teotihuacan: Ceramics, Chronology and Cultural Trends*  
Instituto Nacional de Antropología e Historia, Mexico(INAH)
- 佐藤悦夫  
2002 「テオティワカンの土器についての一考察(1); パトラチケ期からミカオトリ期までの土器」  
『人文社会学部紀要』Vol.2 pp.59-74 富山国際大学
- Sejourne, Laurette  
1966 *Arqueología de Teotihuacán: La Cerámica*  
Fondo de Cultura Económica, México
- Smith, Robert Eliot  
1987 *A Ceramic Sequence from the Pyramid of the Sun, Teotihuacan, Mexico*  
Papers, Vol. 75, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Cambridge, Mass